



会報

松門

- ・松陰敬仰の気運醸成
- ・松陰精神の継承普及
- ・松陰教学の研究振興

○編集発行 財団法人松風会
〒753 山口市大手町2-18
山口県教育会館内 TEL 0839 221218



不明であった

吉田松陰の画像

萩市 田中助一

ているが、現在不明である。

さきに萩市の

松陰神社が昭和十六年七月に

「吉田松陰遺墨

帖」を出版した

時には、その巻頭に同神社所蔵の画像（杉家本）だけを入れた

が、山口県教育会が昭和五十三年二月二十五日に「吉田松陰遺墨帖」を出版した時には、現在

は中谷家本と増野家本がのせられていないのである。

熱心な松陰研究家であった福

本義亮氏（号椿水、萩松本出身）が昭和八年二月に出版された

「吉田松陰の殉国教育」には、

右の外に松浦松洞が貰ったもの

が長崎市豊後町の田辺啓蔵氏に所蔵されていることが書いてある。この松浦松洞も貰っていた

ことは、吉田松陰全集の編纂委員であった安藤紀一氏も書いて居られるが、現在は不明である。

松陰先生が野山獄在獄中大変

世話になられた福川犀之助に与

えられた自賛の跋の一幅は遺族

の福川うの子氏が萩市立明倫小

学校に寄付し、現在は萩市の松

陰遺墨展示館に保管されている。

今年一月三十一日夜私は突然

埼玉県川口市で铸物会社を経営

して居られる熊沢善三郎氏から

電話で、松陰先生の画像や遺墨

について連絡を受け、ついで速

達郵便で所蔵資料の写真を送ら

れた。そして不明であった中谷

家本が現在同氏の所で鄭重に保

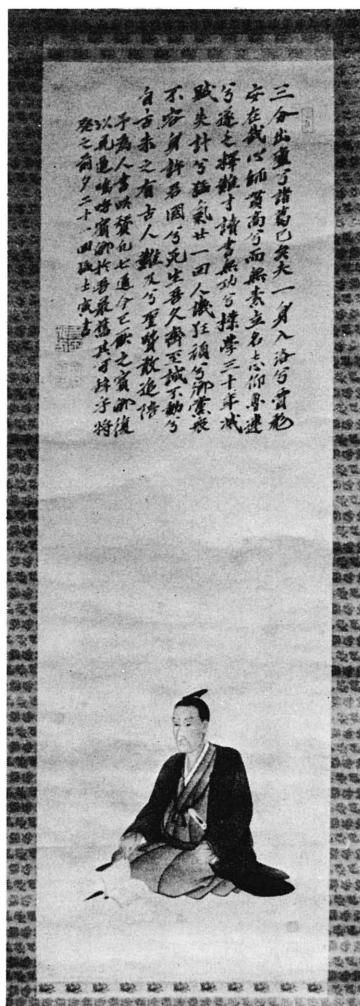
存されていることがわかり、大

いに安堵した次第である。

この画像は松陰先生と親しか

った中谷正亮が最後に賛をして

貰ったものであり中谷の死後甥



吉田松陰画像 中谷家本

村伊之助（楯取素彦）のすすめによって松陰先生が自ら賛を書

かれたものである。しかもその

画像は六幅あり、別に賛だけの

ものが二幅あるといわれていた。

その六幅とは

一、杉家本

二、吉田家本

三、久坂家本

四、品川家本

たもの凡七通」と記して居られ

る。

この外、門人の増野徳民が松

洞の画に文久二年二月久坂玄瑞

に賛をして貰ったものがある。

これは品川氏の手をへて博文館

社長大橋新太郎氏の所蔵となっ

たものように、昭和四年十一

月三十日刊行の青山会館編「松

門烈士遺墨集」に写真ののせら



松陰にとつて 大和魂とは

理事 三輪稔夫

松陰精神ないし人間松陰の核と考えられる二首の和歌は次のとおりである。

○かくすればかくなるものと知りながら已むに已まれぬ大和魂

○身はたとひ武蔵の野辺に朽ぬとも留置まし大和魂

あまりにも有名なこの和歌は朗詠を聴くだけで満場涙を誘う。

日本人には以心伝心である。前者は主として大和魂の作用面というか精神構造を直観的に表現している。後者はどちらかというと大和魂の内容面に重点がかかっている。いずれこの二面については深く考えてみなければならぬが、大和魂（大和心）の語源から検討しないことには誤った解釈に陥る恐れがある。

松陰はこの語を本居宣長から学んだ。本居宣長は平安朝時代の紫式部をはじめとする女性歌人や文学者から学び、さらにその発端を『古事記』の「随神の

道」に求めた。大和魂（大和心）を辞書的に日本人の魂（心）と置き換えて済まされたいこともないが、それでは歴史のぬくもりを湛えた松陰の感受性が抜け落ちてしまう。

本居宣長は十八世紀日本の偉大な思想家であった。日本人として初めて日本人の道、日本人の生活秩序を主体的意図的に組み立てようとした。実際には儒教や仏教の影響から逃れることはできなかったのであるが、彼はまず儒学を获生徂徠の弟子堀景山に学んだ。徂徠の古文辞学が宣長に継承され、やがて宣長の日本と中国との比較古文辞学ともいべきものに発展する契機をここに認めてよいであろう。

とにかく宣長には文学的才能があり、儒学や医学を勉強するかわらわ和歌や国文学の研究を進め、宝暦十三年（一七六三）賀茂真淵に出会った年には、『紫文要領』や『石上私淑言』とい

「伝」の起稿が始まる。

ここではたとえ困ることは、宣長が日本の古典に對した、松陰が宣長や古典・歴史から学んだいわゆる学ぶという付合いの中に、自らを歴史の一部と考える自己確認を素通りしなければならぬことである。さらに、書かれた言の姿以外に歴史の事実

はあり得ないという、我意を捨てての、松陰の「凡そ読書の法は吾が心を虚しくし、胸中に一種の意見を構へず、わが心を書の中へ推し入れて、書の道理如何と見、其の意を迎へ来るべし」に当たる点などを無視して、意

や事（事実・経験）に手取り早く及ばざるを得ないことを断っておく。

宣長は平安朝時代の和歌や『源氏物語』等の中に出てくる「もののあわれを知る」生き方に、人間の本当の意義を認め、はつきりした自覚を持つようになる。宣長自身の経験、自身の

う平安朝文学に関する不朽の名著を書きあげるまでになつてゐる。翌明和元年（一七六四）ごろからは畢生の名著『古事記の大著』

の桂太郎氏（陸軍大将・公爵）が譲り受けられ、更に秋平安古出身の桂内閣の内閣書記官長や文部大臣になられた柴田家門氏に譲られ、明治四十一年十月十日に出版された徳富蘇峰著「吉田松陰」の口絵に入れられている。

大正六年三月に東京帝国大学史料編纂掛で歴史科教授用参考掛図出版に当り、史料編纂官三上参次博士が柴田家門氏の承諾を得て掛図を出版した。

第二次世界大戦中柴田家ではこの画像を東京国立博物館に寄託して居られたが、戦後返還を受け、その後藤倉工業株式会社社長に譲られ、更に有名な古書店弘文荘の手をへて、五十二年六月に熊沢氏の所蔵となったのである。熊沢氏は熱心な松陰崇敬者で、東は龍飛岬まで行かれ西は平戸の山鹿家まで先生の足跡をたどられたそうである。

（付記）本稿は昭和五十八年二月二十七日萩郷土文化研究会で報告した。

（本稿は「史都秋」第四六号に掲載されたものを筆者のご了解を得て転載させていただいたものである。ありがとうございます。）

「知恵を深め広げることだといってもよい。もっと突っ込んでいえば、日本の口承言語にあっては、心ばえが漢文によってつぶされてはならないと宣長には映ったことであろう。」

こうなれば宣長の『古事記』研究による「いにしえの道」「随神の道」の提唱もうなずける。『古事記』の世界には、すべての物や人や動物まで、完成した個物として出てくる。それぞれが神格や人格、物格を持ったものとして出現する。いろいろな要素を組み合わせてものを作るのではない。『古事記』の神話に出てくる個物は皆神（迦美）であり、神の子や子孫である。古代人にはそれが畏敬の念と調和の姿をもって経験され、その経験の永続がすべてであった。この世界は善と幸福だけではなく、悪と不幸が共存している。善神もあり悪神もある。吉

善の中には凶悪の要素があり、凶悪の中には必ず吉善の要素がある。人間は凶悪を嫌い、吉善を行おうとする、これも神の意志である。宣長は神々の名前や言の中に、神代の人々の経験の事実と「もののあわれを知る」原型を直観し感得した。世界の

調和が破れると人生に異変が起ころ、これを「けがれ」と考え、「みそぎ」によって取り除こうとした。「けがれ」を払う祈りによって「まこと」の生命力を回復しようとした。こうした神秘的な神々のはからいを「美知」と呼び、法則らしきもので説明したり強制する儒教や仏教では必ず誤謬が生ずると宣長は考えた。

松陰が日本の歴史に引き付けられたのは比較的遅く、嘉永四

兄杉梅太郎に「備とは艦と礮との謂ならず吾が敷島の大和魂」と詠み与えていることから察すると、宣長の『馭戎慨言』を始めその他少々は嘉永六年に読んだものと考えられる。松陰が宣長の主著『古事記伝』と本格的に取り組んだのは、安政三年十一月から翌四年正月中までで、松下村塾での教育事業がようやく忙しくなる時期である。

松陰には宣長を受け入れる素地はじゅうぶんできていた。趣

身いたし武苑の所也に
巧ぬも宙置まし大和魂

年（一八五一）江戸留学中、他藩人から長州人は「殊に日本の事に暗し」といわれてからである。さらに水戸に赴いて徹底的に日本史研究の必要を痛感。そこで嘉永五年、東北亡命により屏居待罪を機に『日本書紀』以下の歴史書を熟読したものの、『古事記』には及んでいないようである。ところが攘夷のことを「馭戎の事」とした横井小楠あて書簡が嘉永六年十一月二十六日、続いて同年十二月三日付

庭時代から父杉百合之助の神道実践、特に「文政十年の詔」や「神国由来」の素読は、松陰の情の根底に焼き付けられた。最終段階、すなわち安政六年十月二十日付入江杉蔵あて遺書には決定的ともいえる次の文が認められる。「本居学と水戸学とは頗る不同あれども、尊攘の二字はいずれも同じ。平田は又本居学とも違ひ、癖なる所も多けれど……」と。本居学を水戸学よりも先に書き、平田篤胤の国学

とは違ふと断定している点等、格別大事に読み取ることが必要だと思う。

このあたりで初めの和歌に言及したい。踏海に失敗し江戸護送中、泉岳寺前で赤穂義士に手向けた歌である。「赤穂の諸士は主の爲めに仇を報じ、甘んじて都城弄兵の典を犯し、矩方は国の爲めに力を效し、甘んじて海外に闖出するの典を犯す。而して一は成り一は敗る」とあるように、赤穂義士と松陰とが二重写しになっている。前半の五、七、五は、平素であれば誰もが意識することを伝え、後半の七、七は、いざという場合前半の意識は忘れたように振り捨て、不断は眠っている本音の情が噴出し人間全体の行動を支配する。この不思議な経験の事実、心の動きをそのまま詠んでいる。高い理想実現に熱中し本気になればなるほど、不合理さえも乗り切り意味付ける力を日本人は保持している。「皇国の皇国たる所以、人倫の人倫たる所以、夷狄の悪むべき所以」、すなわち天地大自然も一体にした美しい日本の生活秩序に対し、西欧の道は自然や人間を征服し支配するのではないかと直観した松陰

の大和魂が燃えた言葉である。この言葉を発した下田獄での歌も同じ発想のものであった。

○世の人はよしあし事も云はばいへ賤が心（誠に改む）は神ぞ知るらん

前半は意識面、後半は西田幾太郎の無意識フロイドの潜在意識に当たる。山鹿素行は『聖教要録』に「己むことを得ざる、これを誠といふ」と、松陰にとつては「誠」と「大和魂」とは完全に一致している。また日本人は昔から無意識を魂と呼んでいた。魂とは、人間の同一性を維持する歴史、経験、記憶の全体でもある。

最後に、『留魂録』の大和魂は尊王攘夷の精神を留め置きたいと詠んだもので、本文は至誠の実験から始まっている。大和魂の実験と考えてもよいであろう。「馭戎」が「攘夷」になったからとて国民の連帯に変わりはない。僅か三十歳の生涯を「禾稼」に見立て、「四時の順環」を松陰は考える。十月も終りに近づき、秋冬功歳の季、二度とかえらぬ死に対し「もののあわれを覚って」くれさえすれば、松陰の魂魄は門下諸士の魂に生き続けることを松陰は信じた。

松陰の足跡をたずねて ③

江戸 水戸

萩市 末永 明

伝馬町獄跡

小郡駅発の新幹線一番電車は十三時前東京に着いた。直ちに中央区日本橋小伝馬町一丁目五番地、江戸伝馬町獄舎跡地の公園を訪ねる。

樹木の繁る園内は晩秋の陽が記念碑面に淡い斑紋を描く。右手奥中央に「松陰先生終焉之地」の碑。この石は萩城跡から運ばれたもの。その後方には、留魂録巻頭の

身はたとひ武蔵の野辺に朽ぬとも留置まし大和魂の歌が肉太く深く刻まれた丈余の碑が建ち、訪れた私どもに、七生滅賊の松陰の魂が語りかけてくる。

松陰は、嘉永七年四月十五日下田踏海の罪によってここに拘致せられた。その時の回想を生来未だ曾て徳川氏の恩を知らず。獄に下るに及び始めて幕府愛人の政に感ぜり」と述べている。

ここが終焉の地となろうと誰が予想しただろうか。しかも、

東北遊歴前の手紙でその歌を採りあげて「実に人君の歌と一唱三嘆感涙にむせび……」とまでたたえた井伊直弼によって「死罪申付る」となるうとは。



歌碑・松陰先生終焉の地の碑

この地について広瀬豊氏は、「松陰終焉の地として此処を確定する為に屢々この地を訪ひ、古老に尋ね或は区役所にも参つたが、始めこの地の人達は、罪人の刑場なれば不浄の地として抹殺せんとしたもので、大震災後は全くその跡方もなく、これを知るものも少く、知るとも知らざる真似をしたものである。

昭和十一年一月遂にここを確定し、昭和十四年六月廿四日、日本橋区十思国民学校々庭に記念碑を建てた」と述べている。

十思小学校

伝馬町獄跡地に建てられた十思小学校を訪う。

温厚、もの静かな富山校長から前述の碑石の話をおうかがう。敗戦。占領軍の駐留とともに校区の人々は、あの記念碑に關し危惧の念を懷き、有志の手によって石碑は人知れず地中に埋められてしまった。

講和条約締結と共に、当然のことながら「記念碑再建」の議が起ったものの、埋めた場所がわからない。昼夜を分かたぬ奔走の結果漸くその場所をつきとめ探し出すことが出来て現在の公園が出来あがったものである。学校には伝馬町獄舎の二十分の一の模型がある。NHKが放送ドラマに作ったものを、獄と因縁の深いこの学校に寄贈したもの。水をたたえた深い堀。堀に沿った高くて頑丈な塀。窓の小さい獄舎。学校沿革史に載っている「伝馬町牢屋敷・牢内の図」(牢獄平面図)と対照して、おぼしい

ところを探し求める。西奥揚屋はどこ。仕置場はどこ。………当時を回想しての談は尽きない。



獄 舎 模 型

水 戸 へ

嘉永四年。松陰は既に畿内、山陽、西海、東海の地の跋涉を終えていた。残る「東山・北陸は土曠く山峻しくして、古より英雄割拠し、奸兇巢穴す。且つ東は満洲に連り、北は鄂羅に隣す。是れ最も経国の大計の關する所にして、宜しく古今の得失を觀るべきものなり」と、「当秋來春の間彼の辺遊歴」の願書を七月藩に提出した。

ところが「十五日前数日、過書の事起り」事態は急変。しかし松陰は「夫れ大丈夫は誠に一諾を惜しむ」「亡命決し候は十二日昼なり」と山田宇右衛門・兄杉梅太郎に書き送っている。十二月十四日。亡命の心情を「………不忠不孝事 誰肯甘為之一諾不可忽 流落何足辭 縦為一時負 報国尚堪為」の詩に託して、巳時桜田邸を後に、当初の目的地を水戸として、行程実に六百里、百四十日の旅に出た。

松陰の「留置まし大和魂」の淵源を探ねる私どもは、まだ冷めやらぬ終焉の地の感慨を胸に松陰の跡を追って、常盤線の満席電車で水戸に向う。

車窓には、松陰をして「氣象高峻志趣遠 須臾勿忘川与山」と作詩させた刀根川・筑波山、「阿兄今夜定何情」と故郷をしのんだ潮来に続く霞が浦を觀る。十七時前、水戸着。夕日が西の空を赤く染める中を弘道館を訪う。遺構正門に昔を偲び、薄暮の梅林を散策。孔子廟に詣で弘道館記を納めた八卦堂を回る。ネオンの街を宿へ。宿では先着の水戸市教委古橋社教課長が益子教育長の歓迎のことばを携

えての出迎。直ちに明日の打合せ。(宿の人のことば——課長さん、モー長いことお待ちでしたよ。早く来られて……)

水戸の夜は歓談の中に更ける。

水府の風

水戸の朝は早く明ける。市教委差し廻しの車に乗り文化係長・学芸員さんの案内で水戸の遺跡を訪ねる。

一、偕楽園

表門近く、光圀・斉昭を祀る常盤神社。大日本史の草稿をはじめ数々の遺品を納める宝物館、義烈館の建物が目をひく。

藩主斉昭が「衆と偕に楽しむ園」として此処を拓いた由来は偕楽園碑に明らかである。



好文亭の廊下に座して

六十種三千本の梅樹の尽きる

ところに建つ好文亭に上る。亭の名は梅の別名「好文木」からとったもので、春の魁として花を開くこの木を愛した藩主の意図が察せられる。三階の楽寿楼にのぼると眼下に千波湖の景観がひらける。晴天には遠く筑波山が望まれるというが、今朝は煙にかすむ。

二、藩校「弘道館」

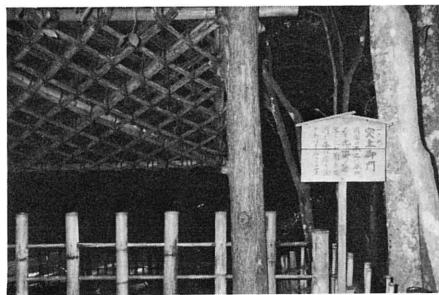
藩主斉昭の発意で一八四一年(天保十二年)に開館。正門と正庁は元治甲子の変に耐えて今なお昔の威容を留めている。正庁玄関の「弘道館」の額は斉昭の筆。正庁内に展示されている会沢憩斎・藤田東湖の像をはじめ数々の遺品遺物は、敷地総面積一万九千平方メートルといわれた藩校の規模・往時がしのばれ、この地に培われた神儒一致・文武不岐・尊皇の、水戸学の風をしたってここを訪れた有志の心がうなずかれる。

三、西山荘

市教委の御好意により、常陸大田市の西山荘まで足をのぼす。ここは、光圀が晩年の約十年間を領民と接しながら「皇統を正閏し人臣を是非す」るを眼目として、大日本史編纂に着手したところ。紀州から運んだ苗を

植えたという杉の老木が天を覆う向うに見える茅屋がそれである。簡素な突上門。老公自ら大日本史の草稿に加筆したといわれる三畳の間と敷居のない次の間。朝毎に皇居を拝したという庭前の遥拝石。静かな林間に小鳥のさえずりが絶えない。

西山荘入口の駐車場から荘まで約三百メートルの砂利道。昔のままのこの道。松陰も歩み、あの茅屋を松陰も見たのである。



突 上 御 門

水府の益

松陰は水戸滞在の模様を「水府の諸才子吾れら三人のここに在るを聞き、稍々来話し、夜々劇談して往々鶏鳴に至るを常と爲す。ここを以て延留すること凡そ二十七日なりき」と、東征

稿の中に述べている。

水戸から、萩に住む兄杉梅太郎に宛てた手紙には、「水戸にて逢ひ候人は皆さるものなり。永井政介・会沢憩斎・豊田彦二郎・桑原幾太郎・宮本庄一郎。……水府の遊歴は大分益を得候様覚え申し候……」と述べる

と共に亡命の事にふれて、「是れ素より年少の客気、書生の空論より出で候事と愧ぢ奉り候へども」太平の世気義地に堕ちんとする時、国家への御奉公の心は人に対して愧ぢるところはなく、益々勇猛心を振起したいと書き送っている。

松陰は、この度の亡命のことによって翌嘉永五年五月十二日に藩命によって帰萩、杉家で屏居待罪の身となった。

この頃来原良三に送った手紙の中で「客冬水府に遊ぶや、首めて会沢・豊田の諸子に踵りて其の語る所を聴き、輒ち嘆じて曰く、「身皇国に生れて、皇国の皇国たる所以を知らざれば、何を以てか天地に立たん」と。帰るや急に六国史を取りて之れを読む。……」と。

同じ頃の記「睡余事録」にも、「……故に先づ日本書紀三十巻を読み、之れに繼ぐに続日本

紀四十巻を以てす」とあるところをみると、「水府の益」は松陰の「国史研究の機」となったことがうかがわれる。そういえば、北畠親房が神皇正統紀を書いたといわれる小田城跡の近くを、松陰は「姓名を変え、街道筋をさけて」歩んだはずであるが、日記ではふれていない。



齊 昭 筆 の 偏 額

列車運行回数の少ない水郡線に乗る急ぎ旅、五人連れの他国者を乗せた水戸市教委の車は、発車少し前に水戸駅に着いた。ここで又松陰の記録を想い出す「水府の風、他邦の人に接するに款待甚だ渥く、歓然として欣びを交へ……」と。

舌たらずの謝辞のままお別れしてしまった。常陸は修史の地であり人情の地である。

築 構 の 海 踏

厚狭教育事務所 木 島 俊 太 郎

「下田踏海」という、松陰の「やむにやまれぬ大和魂」を育てたものは何んであったろうか。心が行為となって現れるのは、その人の人生におけるあらゆる体験の累積が濃縮されて、一つの形を決定づけて表出されるということである。

松陰の生涯は、わずか三十年であつたが、この間の彼の経験の量は、人並ならぬものがある。彼の行動の量もさることながら、彼の読破した書物の量や出合った人の数からしても、その偉大さは、推して知るべしである。

それだけに、ともすれば無謀とも言われかねない海外渡航の決意をした、松陰の心の背景には深いものがあると考へざるを得ない。

松陰のここに至るまでの心の歴史をたどってみることに、その深さを再認識したい。松陰は佐久間象山に、二度に

わたり師事し「象山は当今の豪傑、都下第一の人」と象山を賞揚し、尊敬していた。

この象山の「今日のわが国としては、だれかが外国に行つてその技術を学び、知識をとり入れることが何よりも急がれる必要事である。」という言葉に触発され、渡航の決意をした。さらに、その壮志を高められ、路銀と送別の詩を贈られて、この実行に及んだというところえ方が通説である。

確かに、象山の影響は強く受けているが、この重大事を誘発したものはそんな一元的なものではないと思われる。

松陰のこの時に至るまでのあらゆる蓄積が、一つに結晶し、「ここここに至つてはこれしかない」という形で突出したと考へられる。

人間は幼児期に、周囲のものを、聞き、感じる内に、その人なりの心を構築するフィルター（選択機能）を身につけてゆき、それが、人生の大きな基盤となる。

このフィルターの本質によって同じものを見ても、感じたり感じなかったりする個人差が出てくる。その中から何を選択し、

蓄積していくかということについて、その人なりの指向性が出てくるわけである。

このフィルターは、経験の積み重ねにより、感度も性能も高まり、経験の累積により指向性は増幅されていく。

松陰の場合、幼少時の基盤は、父・母・叔父によってつくられた。

人や家を愛する心は、父母の感化を大きく受けている。特に



谷 三山先生 木像

道のために己を滅するという姿勢は母・滝から学んだものといえる。また、主君や、国に奉ずるという思想は、父・百合之助叔父・玉木文之進に受けるところが大きい。

既にこの時に、「国を思い海外渡航に走らざるを得ない」というような生き方の芽生えがあったと考へるのは考え過ぎであらうか。

松陰十三歳の時、山田亦介よ

り「長沼流兵学」を学んだ。その折、亦介より「ただ防ぐことだけを研究している時ではない。よく勉強して、海外で立派な働きをするように努めなさい」と励まされた。

二十一歳になり、村田清風に海外の様子を学ぶように勧められた。長崎に赴き、五十日間に百余冊の本を読み、「外国より優れるためには、まずその国をよく調べなければならぬ。」と思うようになった。

二十三歳、森田節斉に出合いその影響を強く受ける。兩人意気投合し、節斉は松陰のような男児が得られるなら妻をめぐってもよいと考へたという話が伝えられるほどの仲となった。

節斉の紹介で谷三山翁に会う。松陰はこの谷三山に大きく心酔「谷三山先生の意見のすぐれていることには会うたびごとに驚いている。三山先生御健在のうちに早く教えを受けるようにすることがよいと思う。」と門人たちに三山に会うことを勧めている。

松陰は、この三山から受けた思想的影響が大であったことを自ら人に語っている。

ペリー来航の下田騒動以来、象山に外国の事情を知る急務を

告げられた時、以前、谷三山から「外国の事情を知りさえすれば、自ら対策や進む路は開ける。他に心配はいらない。」と教えられたことを思い出し、決心を固めたということである。

堀井義治著「谷三山」によると、「これだけの達識と意気を持っておられる三山先生が、耳の聞こえぬために、活発に活動されたいのは、本当に国のために惜しいことだ」とつくづく感激を新たにした。「その代わりには、若い自分が何をおいても外国に渡って勉強しなければならぬ」と海外渡航を決意した。」とある。

この渡航について、節斉は思いとどまるようにいさめた。象山は励まし、路銀と詩を贈った。

三山は何も言わなかったが、松陰は三山の志を代行した。松陰の処刑を知った三山は、

「かかる志士を討つならば、自分も討たれよう。」と考へ、藩主に直言する決意を固めた。

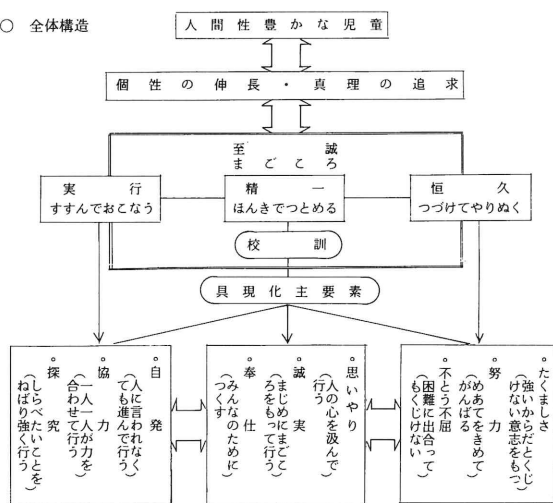
三人とも年齢の差は別にして松陰にとつて尊敬に値する師であるが、三人三様の対応の仕方には、また、それぞれの心の歴史があると言えよう。

椿東小学校長 中嶋義行

信国校長は、三十七年にわたって本校の経営に当り、本校校区の相当年輩者は、ほとんど同校長を通して先生の影響を間接的に受けているものと思われる。

至誠	精一	実行
恒久	道義を先とす	実行を重んず
不息を念とす	ほんきでつとめる	すすんでおこなう
つづけてやりぬく		

事務局通信



松陰先生の誕生地は本校より東南一キロメートルの小高い丘にあるが、眼下に美しい萩の町並、その西北の端には、萩城の

「萩に来てふとおもえらく今
の世を、救わむと起つ松陰は誰
吹く風が今の世の警鐘のように
わが耳を打つ。

(谷口)

(谷口)

資料展示室

資料展示室の入口に芳名録を備えているが記入者は年間約三百六十名、しかし参観して下さる方は資料持帰りの状況から約二千名と推定される。教育会館においての折は、どなたでもぜひお立ち寄りいただきたい。

吉田松陰先生関係図書(つづき)

- ・ 松陰概談 (写本) 序 不繫舟人
- ・ 松陰先生孫 子評註 乃 木將軍加朱 明42
- ・ 吉田松陰先生 野山文稿 安藤紀一
- ・ 山口県教育会 昭7
- ・ 松陰先生士 規七則えん 義井坂秀
- ・ 雄士規七則刊行会 昭10
- ・ 村塾の松陰 香川政一 白銀
- ・ 日新堂書店 昭10
- ・ 都琵琶 吉田松陰 柿本寸鉄
- ・ 作並作曲 昭12
- ・ 松陰詩稿詳解 吉富治一 山口県教育会 昭12
- ・ 坐獄日録 福本椿水 山口県



上 関 詩 碑

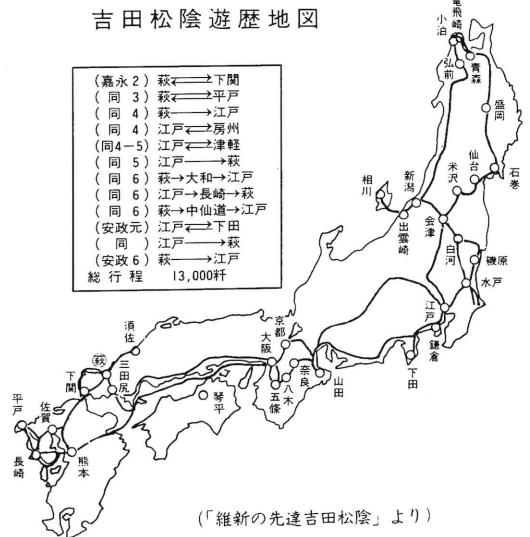
- ・ 教育会 昭14
- ・ 不滅の人吉田松陰 武田勘治 道統社 昭16
- ・ 吉田松陰の精神 陶山 務 第一書房 昭16
- ・ 松陰読本 山口県国漢会 同上 昭16
- ・ 吉田松陰の思想と教育 玖村 敏雄 岩波書店 昭17
- ・ 下田に於ける吉田松陰 福本 義亮 誠文堂新光社 昭17
- ・ 吉田松陰の詩と文 河野通毅 三光社 昭17
- ・ 吉田松陰の母 福本義亮 誠文堂新光社 昭17
- ・ 殉国の吉田松陰 池田宣政 階成社 昭17
- ・ 解説吉田松陰遺文集 栗栖安

- 一 撰書堂 昭17
- ・ 続解説吉田松陰遺文集 同前 昭18
- ・ 吉田松陰選集 武田勘治 読売新報社 昭17
- ・ 講孟餘話 上 釈註広瀬 豊 東京武蔵野書院 昭17
- ・ 講孟餘話 下 同前 昭18
- ・ 吉田松陰の遊歴 妻木忠太 泰山房 昭17
- ・ 吉田松陰の最後 福本義亮 誠文堂新光社 昭17
- ・ 吉田松陰と月性と黙霖 布目 唯信 興教書院 昭17
- ・ 吉田松陰 大陸南進論 福本 義亮 誠文堂新光社 昭17
- ・ 人間吉田松陰 上田庄三郎 啓文社 昭17
- ・ 松下村塾の指導者 岡不可止 文芸春秋社 昭18
- ・ 吉田松陰 藤井貞文 地人書館 昭18
- ・ 吉田松陰 岡不可止 講談社 昭18
- ・ 校正 幽囚録 伊藤銀月編 朝日書房 昭18
- ・ 吉田松陰兵家訓 丹 潔 雄生閣 昭18
- ・ 吉田松陰 武藤貞一 統正社 昭18
- ・ 勤皇志士叢書吉田松陰集 雜賀博愛 興文社 昭18

- ・ 松陰と象山 武田勘治 第一出版協会 昭18
- ・ 吉田松陰殉国の精神 和田健爾 京文社書店 昭18
- ・ 勤皇の神吉田松陰 広瀬 豊 日本青年教育会 昭18
- ・ 詩吟物語生きている松陰 近藤留蔵 松陰精神普及会 昭19
- ・ 吉田松陰の研究 広瀬 豊 至文堂 昭19
- ・ 講孟餘話の研究上 玖村敏雄 西川平吉 大阪新聞社 昭19
- ・ 吉田松陰の精神 玖村敏雄 春陽社 昭20
- ・ 大楠公と吉田松陰七生説 吉野精神普及会 同上 昭32

(編集後記)
▼松陰の感受性をそのまゝ、歴史のぬくもりとしてとらえようとされた三輪先生の玉稿は熟読玩味してください。▼不明となっていた松陰画像が発見され、喜びに耐えません。▼「足跡をたずねて③」の筆者末永先生は、この旅をテープに録画しておられます。▼「踏海の構築」は、人間の経験の蓄積が、その後の選択機能や行為を決定するといふ提唱で、極めて重要なポイントです。▼棟東小学校に松陰精神は如何に生きているかを、中嶋校長に聞きました。ありがとうございました。(石川)

吉田松陰遊歴地図



(「維新の先達吉田松陰」より)